

所属学部の違いによるネット依存度の比較

佐藤 健¹⁾, 中島 みづき²⁾, 安岡 広志³⁾, 原 優歩¹⁾

1) 実践女子大学 生活科学部

2) 東京大学大学院総合文化研究科

3) 東京情報大学 総合情報学部

sato-takeshi@jissen.ac.jp

Comparison of net dependence by undergraduate department

Takeshi Sato¹⁾, Mizuki Nakajima²⁾, Hiroshi Yasuoka³⁾, Yuho Hara¹⁾

1) Jissen Women's University

2) The University of Tokyo, Graduate School of Arts and Sciences

3) Tokyo University of Information Sciences

概要

ソーシャルメディアの進展やスマートフォンの急速な普及により、利便性が向上する一方で、ネットの長時間利用により実生活に悪影響が出る、いわゆる「ネット依存」と呼ばれる事例が一部で問題となっている。平成26年3月に厚生労働省健康局から新しい睡眠指針“健康づくりのための睡眠指針2014～睡眠12箇条～”が発表された。本調査研究では、東京情報大学のオンラインアンケートサーバーを用いて、各教育機関の端末室等で全体説明を行わない、工科系ではないA女子大学の学生710名とB工科系大学の学生324名、C総合大学の学生25名の有効回答を得た。インターネットとスマートフォン、フィチャフォンを中心とした情報環境の利用実態とヤング基準によるネット依存傾向を判定した結果、被験者全体の98%に、中程度以上のネット依存傾向があることが明らかとなった。所属学部別では、A女子大学53%、B工科系大学58%、C総合大学では44%が高いネット依存傾向にあった。本調査結果から、所属学部に関係なく大学生の全体に高いネット依存傾向が見られた。しかし、実生活中の使用場面についての回答や生活の変化についての回答からは、ネットの利用が日常生活に影響しているとは考察しにくい結果を示した。所属の学部によるネット依存度には影響がなく、また大学生はネット社会に順応して生活していることが考えられた。

1 はじめに

近年、ソーシャルメディアやIotの発展により大学生におけるネットの利用率が急速に上昇し、LINEやTwitter含むソーシャルメディアの利用が進展した。従来のメールや通話とは異なる新しいコミュニケーションの形態が拡大している^[1]。また、それらに伴い、ソーシャルメディアの長時間利用など、これら新しいコミュニケーション形態への依存傾向の増加などが懸念されるようになった。

平成26年、総務省情報通信政策研究所では、その実態を明らかにするため主に中学・高校生を対象に、スマートフォン・アプリの利用実態及び家庭環境や友人関係などの利用環境と、ネット依存傾向の関係に関する調査を実施した。コミュニケーションを指向するスマートフォンユーザーでネ

ットの依存が高くなりやすい傾向が示された。インターネット及びスマートフォン等の利用について警鐘が鳴らされた^[2]。

健康との関連については、インターネットの使用が長時間化することで、生活習慣の乱れや目の疲労などの身体的不調、精神面に悪影響を及ぼす可能性が指摘されている^[4]。古くから、Young(1998)はインターネット依存の特徴とその影響が明らかにした。インターネットの長時間使用による心身の問題発生、使用制限による離脱症状など、社会生活の継続をも困難にさせる実態が発生する状況をインターネット依存としている。

大学生においては課題作成のためにソーシャルメディアの利用時間は高校生までに比べ増加する。加えて、工科系などの所属学部によっては講義の大半がソーシャルメディアを利用しながらパソコンを利用する。工科系以外の学部に比べてソーシ

ャルメディアの利用時間は長い。総務省が発表した、ネット依存度調査においては、大学生と社会人が区別されておらず、大学生のネット依存度傾向については明確に言及ができていない。また、所属学部別のネット依存度の調査は行われていない。

本研究は、工科系の大学生と工科系以外の大学生のネット依存度を比較することを目的とした。

2 方法

2.1 調査対象者と手続きについて

調査対象者は、工科系ではない A 女子大学の学生 710 名と B 工科大学の学生 324 名、C 総合大学の学生 25 名であった。本研究の実施に当たっては、実践女子大学研究倫理委員会の承認を受けて実施された (H26-2)。

2.2 ネット依存傾向のデータ取得方法

本研究において、「Young20」と呼ばれる判定方法を用い、ウェブアンケート調査にて比較し、所属学部別の見地から分析を行う。

「Young20」とは、1998 年に Young 氏によって開発され、決められた 20 問のインターネット利用状況に関する設問に対し、5 段階 (まったくない (1 点)、まれにある (2 点)、ときどきある (3 点)、よくある (4 点)、いつもある (5 点)) で回答する。合計 100~20 点で「70 点以上 (ネット依存的傾向高)」「40-69 点 (ネット依存的傾向中)」「20-39 点 (ネット依存的傾向低)」の 3 区分に分類する手法である。質問項目は表 1 に示した。項目に含まれる内容は、インターネットの長時間使用による心身・生活習慣・社会生活上の問題の発生、学業や人間関係といった現実社会の重要事項を軽視・無視する傾向、周囲からの問題の指摘、使用制限による離脱症状やそれに類する状態、現実問題からの逃避などである。今回の調査は、ウェブアンケート調査であり、ウェブアンケートの性格上、紙の調査票形式よりもネットの利用傾向が高く出る可能性が大きいことは留意する必要がある。

2.3 統計的処理

統計的処理については、t 検定を有意水準 5%

で行った。統計処理には SAS university Edition を使用した。

3 結果

3.1 Young20 合計点

本研究では大学生におけるネット依存的傾向として、所属学部別の傾向について検討した。ネット依存的傾向について集計した結果、工科系ではない A 女子大学では 53% の調査対象者がネット依存的傾向高に分類された。工科系大学の B 大学では 58% の調査対象者がネット依存的傾向高に分類された。総合大学の C 大学では 44% の調査対象者がネット依存的傾向高に分類された (図 1)。

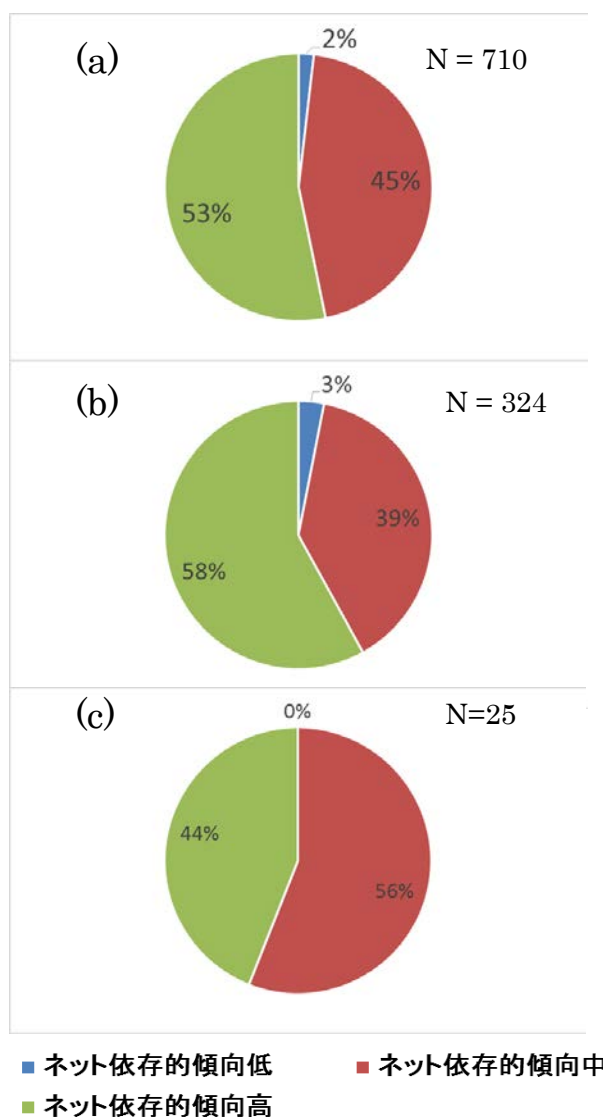


図 1. ネット依存度傾向の割合 (a) A 大学、(b) B 大学、(c) C 大学

3.2 実生活中的のスマートフォンの影響

ネット利用環境についての問いにおいて、1. 自宅の部屋でパソコンによりインターネットを利用、2. 家族と共用のパソコンでインターネット利用、3. スマートフォン/フィーチャーフォンでインターネット利用、4. インターネットネット環境はない、5. 無回答の中で最も利用している。方法はどの群においてもスマートフォン/フィーチャーフォンの割合が高かった。その割合は全体の6割を超えた。また、“スマートフォンを持ってからの生活の変化について利用時間が短くなったと感じるものは”という問いに関しては、すべての群においてテレビを見る時間との回答が最も高い割合を示した。C大学においては、勉強をする時間が睡眠時間、家においてパソコンでネットを利用する時間と同率割合で3番目に高い割合を示した。(図2)。

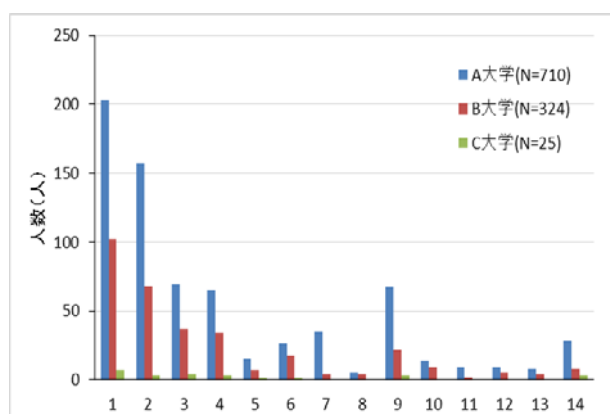


図2.各群における、スマートフォン/フィーチャーフォンを持ってからの生活の変化について利用時間が短くなったと感じるものの割合

表1. 図2中の“スマートフォン/フィーチャーフォンを持ってからの生活の変化について利用時間が短くなったと感じるもの”の選択肢

1	テレビを見る時間
2	睡眠時間
3	本を読む時間
4	家においてパソコンでネットを利用する時間
5	雑誌を読む時間
6	マンガを読む時間
7	パソコンで動画を視聴す・読書
8	新聞を読む時間
9	勉強する時間
10	家族と顔を合わせて話す時間
11	友達と顔を合わせて話す時間
12	スマートフォンでネットを利用する時間
13	スマートフォンで動画を視聴する時間
14	無回答

また、スマートフォン/フィーチャーフォンを持ってから利用時間が短くなったと感じるものの割合については、各大学で最も“テレビを見る時間”の回答率が高かった。勉強をする時間と答えたのは、A・B大学で5番目であり、C大学では同率で3番目であった。“ネットを長く利用していたために、家庭での役割や家事をおろそかにすることはあるか”との問いに関しては、A大学では、“時々ある”との回答がもっとも高く28%であった。B・C大学では、“まれにある”との回答がもっとも高くそれぞれ29%と32%であった。

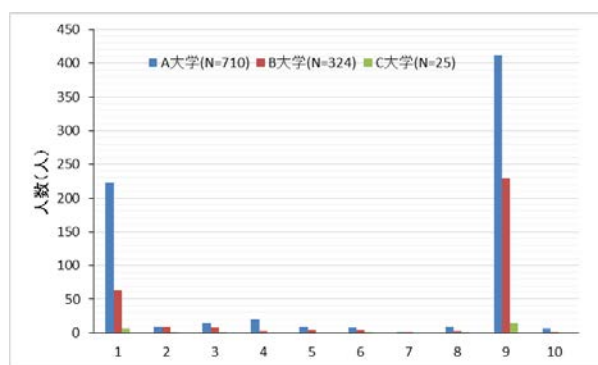


図3.各群における、ネットを利用することによる日常生活への影響についての割合

表2. 図3中の“ネットを利用することによる日常生活への影響”の選択肢

1	自分はネット依存だと思う
2	ネットの利用が原因でひきこもりになった
3	ネットを利用して約束事をすぼかすことがある
4	自分はネットにお金を使いすぎていると思う。
5	ネットの利用が原因で、現実での友達、知り合いの数が減っている
6	ネットの利用が原因で、友達、恋人、家族、会社の人との関係が悪化している
7	ネットの利用が原因で、不登校、留年、休学、退職、降格、退職などを経験したことがある
8	ネットの利用が原因で、健康を損ね、病院に行ったことがある
9	該当なし
10	無回答

ソーシャルメディアの利用シーンについての回答率は、すべての群において移動中が最も高かった(A大学=28%,B大学=31%,C大学=32%)。

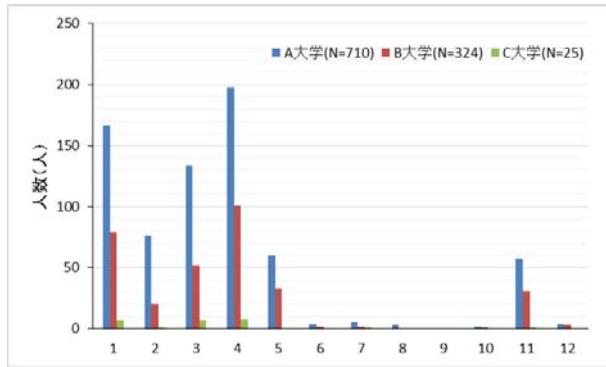


図 4.各群における、ソーシャルメディアの利用シーンについての割合

表 3. 図 4 中の“ソーシャルメディアの利用シーン”の選択肢

1	就寝前
2	自宅でテレビを見ながら
3	待ち合わせなどの空き時間
4	移動中
5	学校・会社の休み時間
6	起床直後
7	授業中・工作中
8	食事中
9	トイレの中
10	入浴中
11	あてはまるものはない
12	無回答

4 考察

インターネット依存という考え方は、インターネットの普及に伴い、オンラインゲームなどに没頭し日常生活に支障をきたす人が出現する中で、1998年にピッツバーグ大学心理学者キンバリー・ヤングが提唱した^[5]。

一世紀前までは、インターネットはデスクトップ型のパソコンの前に向かって行うというスタイルが主流であった。しかし、スマートフォンやタブレット端末の販売により、ネットの利用形態は変化した。スマートフォン等はパソコン機能を取り入れた持ち運び可能な携帯電話である。そして、Wi-Fiに代表される無線LANを中心とした通信技術によりどこでもいつでもネットに接続することが可能になった。利用者の

増加に伴い、駅などの公共施設でも無料のWi-Fiが接続可能なサービスが広まりつつある。

平成25年度の総務省情報通信政策研究所報告書では、学生別に年代が高くなるにつれネット依存傾向が高くなり、高校生の割合が60%ともっとも高いと報告されている^[3]。本調査研究では、大学生を対象とし、被験者全体の98%に、中程度以上のネット依存傾向があることが明らかとなった。この結果からみて、先に述べた調査報告の結果と同じであるが、ネット依存割合がさらに高い傾向にある。所属学部別では、女子大学では53%、工科大では58%、総合大学では44%がヤング判定による高いポイントのネット依存傾向であることが明らかとなった。本調査結果から、大学生の全体に高いネット依存傾向が見られたが、所属学部による統計学的な有意な差は見られなかった。また、“スマートフォン/フィーチャーフォンを持つてからの生活の変化について利用時間が短くなったと感じるものは”という問いに対して、どの群においても最も高い割合を示したのはテレビを見る時間であった。勉強時間と回答したのは各群においても15%に到達はしなかった。つまり、スマートフォンでのネット利用により学修の時間が短縮されたとは明言できない状況であった。

本研究により、大学生におけるネット依存傾向が見られても、学修の時間に影響しているとは考えにくい結果となった。

参考文献

- [1] 財団法人インターネット協会:インターネット白書2005.インプレス, 2005.
- [2] 総務省、情報通信白書 平成26年度版、<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h26/html/nc143110.html>
- [3] 総務省情報通信政策研究所: 青少年のインターネット利用と依存傾向に関する調査, 東京, 総務省, 2013.
- [4] Kraut, R., et al.: Internet paradox A social technology that reduce social involvement and psychological well-being? *American Psychologist*, 53:1017-1031, 1998.
- [5] Young, K, Internet Addiction: The Emergence of a New Clinical Disorder, *Cyber Psychology & Behavior*, 1:237-244, 1998